



す。同じ日本といえども、今まで生きてきた場所とは全く文化が違う。国内留学という言葉、まさにその通りだと思えました。

活動内容

協力隊としての主な活動は、農作業や交流事業やイベントのお手伝い、地域資源の調査などでした。役場企画調整課を拠点として、大学生や都市の人との交流事業で地域の人とつながりができ、また西山区に住まわせてもらったので地域の共同作業や行事にも村民

村の日常

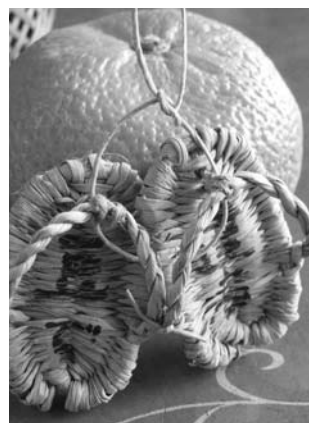
私にとっては、鮫川村の当たり前が非常に興味深く新鮮でした。山や田や畑が移り行く風景も、夏は朝と晩方働き、冬は少しゆっくり過ごす農家さんのリズムも、突然訪ねても「あがらっしょ」「お茶飲みたい」と家の中に招き入れてお茶飲み話することも、村にとって当たり前の日常が、特別な日常に感じました。

一方、都市の生活においては、美しい山の風景は一枚の写真に切り取られた景色など視覚だけに訴えかけるもの。野菜は人間が食べておいしいと思う結果の姿だけを消費する。春夏秋冬変わらない時計時間で仕事をするため、天気にも関係なく仕事をし、仕事とプライベートがはっきり分かれる人も多い。

よくわからない人がきたらインターホンで用件だけを話す。簡潔さや結果だけを求めるなら、それでいいと思います。むしろ今はそれが当たり前前の社会です。でも、つながりが絶たれているために、本当に大事なことが見えにくくなっていると思うのです。

いつまでも冬だと思っていた風景は、いつの間にか淡く色づいていました。まるで水彩画の世界だと思いました。ばしばしばありました。きっと村に住む人にとっては一番好きな季節なのかなあと思います。待ちわびた春、動き出す春。

ある農家さんは「何にもなかった田んぼが青田になったら感動だよ」と言いました。でもその時は理解できていません。でも実感することはできませんでした。なぜなら、体験としての田植えしか経験していません。稲を植える前の田んぼがどんな状態だったか知っている、という以前に、去年の秋に今年はどうだったかから来年はこうしたいと考えていた。長い冬を越え、土づくりに戻って、やっと新しい苗が田んぼに植わった。苗の状態を見て、今何が必要なのかを考える。子どもを育てるように気に掛ける。収穫の喜びもつかの間、また来年のことを考える。そのサイクルの中に、つながりの中にあるか



でもらいたいか」という資料に、天体観測会と大豆生産の文字があったからでした。天体観測会に魅かれたのは、単に星が好きだったからです。大豆に魅かれたのは、もし将来農業をするなら、大豆と米は絶対作るうと思っていたからです。味噌、醤油、豆腐、きな粉など大豆加工品は毎日の食卓に欠かせないのに、大豆を輸入に頼っている現実がある。農業に興味を抱いたときから、そんな矛盾はおかしいと感じていました。だから、大豆で地域づくりをし、大豆栽培に力を入れている鮫川村がとても魅力的だったのです。

村の第一印象

鮫川村に着いて、まず冬だと思いませんでした。地元(兵庫県)では桜が3月の末に咲き、コートも脱ぎ捨て、春の装いだったのに、暖房器具はまだつけている、4月に雪が降る(村でも珍しいとは聞きました)。玄関を入れればすぐに掘りごたつというのは物珍しくて、炭ごたつには初めて入りました。そして何より、村の人同士で話している会話を聞き取ることが難しいことは衝撃的でした。何を言ったのかわからなくて、聞き直してもわからないことも何度もありました。勘違いして受け取り、秋まで気が付かなかったこともありま

者の新しい進路の開拓を目指します。私はどんな生き方がしたいのか、どんなシゴトがしたいのかという進路選択で悩んでいた時に協力隊事業を知り、「1年間の農村生活」に魅力を感じました。短期間の農業体験ではなく、1年を通じた農村生活をするのができる。農作業だけでなく、農村の地域を体験できる。その1年で自分の人生にプラスになることを得ることができるはずだと直感し、協力隊に応募しました。

鮫川村を希望した理由は、役場が提出した「どんな村か、どんなことをし

ピックアップ
PICK UP

鮫川村で出会ったモノ

緑のふるさと協力隊活動報告(写真・文/松本かおり)



緑のふるさと協力隊として昨年4月に鮫川村にやってきた松本かおりさん。3月10日、無事1年間の任務を終え旅立ちました。広報さめがわでは、毎月「私と鮫川とぶーちゃんと」と題して、彼女の鮫川村での体験記をご紹介します。今月号では、1年間の活動をまとめた報告書が完成しましたので、ご紹介します。彼女の目には鮫川村がどのように映ったのでしょうか。

はじめに — 私が鮫川村に来た理由 —

2009年秋、大学4年生だった時に「第17期緑のふるさと協力隊」に応募することを決意し派遣が決定することから、鮫川村との関係が始まります。緑のふるさと協力隊とは、都会の若者を農山村に1年間派遣するNPO法人地球緑化センターの事業で、「農山村という魅力あふれるフィールドを若者に知ってもらおう一方、その若者の助けを借りて、農山村に住む人たちに地域の魅力を再発見してもらうプログラム」です。緑化センターと自治体と協力隊隊員の三者が連携し、地域づくりや若

ら、その言葉が言えるのだと、今は思っています。

くわとしわ

農家さんと農作業をしていると、その速さや正確さ、力強さ、そして美しさに驚きます。特に鍬・かけや使いは、動作の美しさに思わず見とれたこともありました。力強く、しなやかで、道具をまるで体の一部のように使うのです。無駄な動きが一切ない。同じようにやろうとしても、変に力が入りすぐに疲れてしまいます。農家さんの作業の美しさは苦労や試行錯誤の経験を積み、余分なもの、無駄なものが削がれた本質そのものだと思います。何度も何度も経験し、どうしたら楽にできるか、どうしたら速くできるか、どうしたら確実にできるか、どうしたらきれいにできるか、どうしたら……と常に考えている。昔はこうした、こうだったと話を聞いて、昔からずっとやっていて、という事実があるからこそなのだと思います。

「生きてたらな、いろいろあるわな。」昔の苦労を笑顔で話してくれるばあちゃん。その顔のしわにすべて刻み込まれている気がしました。一生懸命生きてきた証。鮫川のリズムで生きてきた印。一生懸命生きてきた、そのばあちゃん

できない。村の姿もまた違うものだったのかもしれない。それがなければ生きられなかったという現実を知りました。

一方で、化学の力の怖さも知りませんでした。和紙を作るときに使う漂白剤。それは素手で触ってはいけない、直接吸ってはいけない劇薬です。でも、食品添加物の文字が書かれている。食品に添加するのはごく微量でしょう。ほんの少ししか入っていないから、積み重ねや濃縮するとどうなるか、そんな危ないものを食べているんだと怖くなりました。

化学肥料や農薬の使用を減らしたほうが良いという考えは変わりませんが、一方的に悪だと決め付ける考え方は変わりました。杉の木もそうで、森を真っ暗にする杉の木は悪だと思っていました。でも、「オレが植えたんだ」「あの頃は補助事業でね……」と話を聞いたり、林業体験したりすると、杉が完全悪だとは思わなくなりました。

きつと今まで情報だけに左右されてきたんだなと思います。情報は端的で簡潔なモノに変えられることが多く、一部分の側面しか見せないことも多い。村ではつながりのある農作業をして、じいちゃんばあちゃんの昔話を聞きました。化学肥料や農薬を完全に悪だと

のしわがとて

も愛おしく思えました。多くを語らない、でも一生懸命さが伝わってくるじいちゃん

のしわも大好きでした。どんな風に生きてきたかでしわが刻みこまれる、それは本当だと思

いました。年をとればしわが刻まれる。それなりに生きてくれば、それなりに。同じく刻まれるならば、こんなばあちゃんのような、じいちゃんのようなしわを刻みたいと思いました。

美しい鍬使いはすぐにできるものではないし、簡単にできるものでもありません。きつと時間をかけて、経験を積み、ゆっくりゆっくり変化することの結果としての美しさや現れてくるしわ。今できることは、それらに触れることと、一生懸命に生きることだと思いました。これは何にだって言えることで、すぐに素晴らしい結果がでることなんて多くないと思うのです。



農業のこと

化学肥料や農薬の使用をなくした農産物の生産に憧れていました。化学肥料や農薬が土を汚染し、水を汚染する。そこで作られたものを食べる私たちは汚染される。農業が環境を破壊した。自然に寄り添った農法をすべきだ、と思っていました。

村でも資源循環型農業を推進しています。堆肥センターが建設されたり、手まめ館で講習があったりします。でも、村に来て思ったことは、化学の力で日本の食卓は潤い、村の人が生きてこれたということでした。化学の力がなければ、都市部で野菜を買うことは

決めつけて否定することは、生きるために必死だった時代を過ごしたじいちゃんばあちゃんを否定することのように思えます。時代の変化に伴って、価値観も変化します。でも、よくないとただ決めつけるよりも、それまでを認めただ上でのほうが良いと思うほうが、未来が明るいと思えました。

食べること

たぐさんのお家でごはんをいただきました。家族のために作ったものをみんなで食べる。みんなで食べるから、またおいしさが増す。



敬老会の日に、「家のばあちゃん、ほんとに元気でよく食べるんだ。食べることは生きることってホントだよ。」と言う人がいました。病気をして一定期間食べることができなくて驚くほど痩せてしまった人が、「食べられることってほんとに幸せだよ。」と言いました。食べることは生きること、生きることは食べること。食べるといふ当たり前のことが、実は一番の幸せではないかと思えます。

手まめ館のお母さんは「愛情って手間暇かけることだと思うの。」と言いました。大学の講義の中で「愛情と時間は比例する、愛情はその対象に対してどれだけ時間をかけられるかだ」と聞いたことを思い出しました。だけど講義で聞いた時よりも、あんこを作りながら聞いた時の方がくつと心に響きました。

食べること。それは当り前のことだけど、人としての幸せがいっぱい詰まっている気がします。

山さ行く

鮫川村の人は「畑に行く」ことを「山さ行く」と言います。ワラビやヨモギなどを採りに行くことと、畑の野菜を収穫することと大きく差がないのかなと思います。昔の食糧難の時代は





山を切り開いて畑や田んぼを作ったから、家の後ろに山を背負っているから、いろんな理由があるでしょう。いずれにしても、鮫川村の豊富な食材は「山」から収穫されていると思えました。

多様な文化

たいていの食卓の場にあったモノ、それはその家自慢のお漬物。季節を通して、いろんな種類の漬物がありました。同じ大根の漬物でも家によって本当に味が違う。漬け方が違う。それぞれの良さがある。鮫川村の食の代表格だと思えます。その人その人の、その家その家の方法や味がある。地域全体からすると、多様な個性の集まりだと、私は思いました。

学校の行き帰りに山の木の実を採って食べたんだ、と何人もの人が話してくれました。山の中を歩き、食べられるものを採取することは日常にあつて、だから、村外の人が山を歩くよりも、ずっとたやすいことなんだと思います。それは、小さな頃からこの地に生き、ここで生きる術を知っているからと言いつたことができます。

また、節分の話を数人集まった場所でしたとき、うちはこうだよ、ここはこうだと情報飛び交いました。凍み餅づくりや凍み大根づくりも、家によって違う方法でつくることを知りました。家ごとに方法が違って、それを知らないわけではない。自分を認め、他を認めることが普通にある。他を認めるから関係は安定している、自分を認めるから多様性があると思えます。

一方で、じいちゃんばあちゃん言葉と若い人の言葉は少し違います。テレビが標準語だから、学校が標準語だから、時代の波は言葉も統一しようとしている。でも、鮫川言葉を受け継いでほしいと願います。言葉を受け継ぐということは文化を受け継ぐということだと思ふからです。

村に思うこと

鮫川村は「まめで達者な村づくり事業」が村外からも注目を集め、交流人口も増えているようです。東京農業大学の里山景観保全活動、東京鮫川会の探訪ツアー、千葉県の小学生の教育旅行、農協観光ツアー、田んぼや柿の木のオーナー制度など去年もたくさんありました。協力隊事業も都市との交流のひとつでしょう。村外から来た一人として、村に思うことがあります。

それは、昔の話を伝えていってほしいということ。昔こうだったから今があるということを変えてほしい。昔から変わらないこと変わってしまったこと、それがあから今がある。それと、1日、1か月、1年というサイクルと地域内のつながり。継続と変化と循環と絆と：そんなつながりがここにはあると思うのです。ある農家さんは休憩中に、昔の村の様子、今の村や村づく

りのこと、将来の姿の予想や理想を話してくれたことがあります。このとき、過去現在未来を同じように考えていることに強く感銘を受けたことを覚えていきます。つながりがあることにあるから、それが普通のことだから、そんな風に考えることができるのかなと思いました。

都市部では、常に自分は世の中より劣っているかもしれないというイメージに囚われている人も多い。他人と比較して、他人からの評価を気にして、自分を形づくるものも軸とするものもないままに。そして自分の居場所を見失ってしまう。鮫川村のようにいろんなつながりがあるところでは、それを受け止めてくれるような気がします。だから、農村には可能性がある、農村から社会を変えることができると思うのです。どうか、このつながりがあることを、日々の生活の幸せを、今を生きていることを、若い人へ、子どもたちへ伝えてください。

■おわりに

1年間でたくさんの気持ちを頂きました。それは言葉だったり、表情だったり、気持ちのこもったモノだったり、受け止められないくらい、たくさんいただきました。遠くから一人であ

ていることに対して、私以上に地域の皆さんが気にしてくださったように思えます。そんな思いは親心にも似ていて、また、若者や子どもを地域で育てていたという、昔、当たり前だったことも似ているように感じました。

また、今を生きているという言葉の本質にも気づくことができたような気がします。日々の活動では自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分の手で触れて、自分の感覚をいっぱい使いました。そこには今を生きているという実感がありました。そして、数日後、数か月後、数年後に何かを得るために今一生懸命頑張つて、頑張りながらも、どんな状態にあるのか、これからどうなるのか、どうしたら築けるのかを考えている。物事の全体やずっと先を見つめながらも、今を頑張る楽しんでいる。それが、今を生きているという言葉の本質なのかなと思いました。

目指すところが変わらなければ、その方法や手段は柔軟に変化してもいい。そう思うようになりました。ここで得たこと、気づいたことをすべて言葉にすることができたかどうかはわかりません。この1年で、本当にたくさんの気づきときっかけと恩をいただきました。今すぐにするすべての恩返しをすることは難しいことですが、いづれそれにつながることができるように、一生懸命生きていきたいと思えます。1年間、ありがとうございました。感謝の気持ちをこめて――

